

【一】古代インドには、行報（業報）輪廻と言つて、一生の行ないによつて死んだ後も別の生き物として生まれ変わり続けると考えられ、この輪廻を断ち切つてこそ生老病死から解放されるとされました。釈尊は二十九歳の時、その生老病死の苦よりの脱却を計つて出家されました。

釈尊は悟りを求めて、最初六年間の苦行に徹しますが、どうしても悟ることが出来ません。遂には苦行者達と別れて苦行林を出ます。その時、どこからともなく歌が聞こえてきます。

弦が強けりや きつくて切れる

弦が弱けりや なお鳴らぬ

強い弱いを調子にしめて

澄んだねおとを聞かしておくれ

聞いた釈尊は、享樂もいけないが苦行もいけないと心中深く得るところがあり、村の娘スジャータが差し出す飯物の供養を受け元氣を取り戻します。川に入つて身を清め、新しい気分でブツダガヤの菩提樹下に歩を進め、「我若し悟らざんば誓つてこの坐を起たず」と心に銘じて禪定（坐禪）に入ります。時はまさに十二月一日のことです。心の中でいろいろな葛藤が起こりますが、徐々に自覚（さと）りの兆候が広がっていきます。八日目の朝、明けの明星がキラリと輝きます。

その輝きが釈尊の目を大きく開かせたのです。「奇なるかな、奇なるかな！ 山川

草木 悉皆成仏」と宣言されたのです。花園大学はそこから始まったのです。

高く仰ぎて心躍る、われらが学園、花園大学。

【二】釈尊はある時、靈鷲山で説法されます。説法を聞こうとする大勢の弟子や信者たちが、前後左右を取り囲みます。静まり返っている大衆の前で、釈尊は

黙って静かに一枝の花を拈じて示されます。「この時、衆は皆默然たり」——誰も
釈尊の所作に示された真意を見て取る者がなく、ただぼんやりとしているだけで
す。しかし、その中で迦葉尊者のみがこれを見て、にっこりと微笑します。

「われに正法眼蔵、涅槃妙心、実相無相、微妙の法門あり」

——私達は誰でも本来素晴らしい心、仏心を持っている。それは見るがまま、
あるがままの姿であり、その姿も「姿なき姿」と達見する教えです。

この素晴らしい仏の教えを今、迦葉尊者に以心伝心、心から心へ伝えることが
出来たのです。その心が今に伝わり、その教えをこの花園大学で学んでいるので
す。

とわの微笑をたたえたる、われらが学園、花園大学。

【三】釈尊から始まった禅の教えは迦葉尊者に伝持され、以来二十八祖達磨大師
に伝わります。達磨大師は中国に渡り梁の武帝と問答を交わされますが、「無功德
かくねんむしょう」「不識」の真意は皇帝に伝わらず、揚子江を渡り嵩山少林寺の奥
の山にある洞窟での九年間の面壁坐禅に入られます。

諸学を修めながら教えに迷った慧可は達磨大師のことを耳にし、洞窟を訪ね入
門を願うのですが、一向に許されません。雪はしんしんと降り慧可の足下を埋め
ていきます。心に決意を秘め、自分の腕を切り落とし、血したたる腕を差し出し、
命がけで教えを請います。

「心いまだ安からず、乞う師、安心せしめよ」

「心を將ち来たれ、汝がために安んぜん」

「心を覓もとむるに了つひに不可得ふかどくなり」

「汝が為に安心し竟おほんぬ」

達磨安心だるまあんじんの公案です。

慧可大師の法を求める決死のこころ、それが花園大学にいきづいているのです。熱血いままたぎりたり、われらが学園、花園大学。

【四】本学の設立母体である臨濟宗妙心寺の開創は第九十五代の天皇、そして二十歳で上皇となられた花園法皇が、御自身の花園離宮を改めて禅寺とされたのに始まります。

当時は、鎌倉幕府が滅び室町幕府が起こる間の動乱期で、いわゆる南北朝時代、法皇は世相の混乱と人心の荒廃を深く憂えられ、仏教、特に禅への道は大徳寺の開山、大燈国師について学ばれます。そして世の平安を願って禅寺開創を發願され、大燈国師のお指図通り、貞和三年（一二四七）、関山慧玄かんざんえげん禅師に妙心寺の造営を依頼されました。

以来六〇〇有余年、法皇の御こころざしは綿々として伝わり、明治五年に創立された「般若林はんじゃりん」に受け継がれ、明治三六年に花園学林と名を変えて現在に至っているのです。

花園法皇のこの思いをしっかりと受け継いで花園大学で学んでいこう。
掲げて重き使命あり、われらが学園、花園大学。